

郷土の明日を見据えて

先人の生き方に学ぶ



まえがき

我が国における教育改革の大きな節目として、平成二十年三月に、新しい学習指導要領が告示されました。道徳については、他教科に先んじて、平成二十一年度から実施されております。学校においては、今まさに、新学習指導要領の趣旨と改善事項に基づく授業実践に取り組まれ、あわせて道徳教育の全体計画、年間指導計画の見直し、改善作業に取り組んでいることとされています。

今回の指導要領では、「道徳の時間を要（かなめ）」として学校の教育活動全体を通じて行うものであること」などの道徳教育のポイントがいくつか示されておりますが、その中の一つに「児童生徒が感動を覚える魅力的な教材を開発・活用すること」があります。

本県におきましても、教育委員会が所管する分野の今後十年間の基本方向を示すガイドラインとして、「岩手の教育振興」を作成しました。その中で、「人間としての在り方、生き方について考える力の育成と心の教育の充実を図り、他人を思いやり、良好な人間関係を築くことのできる力、自然や命あるものを大切にすることなど、児童生徒の内面に根ざした道徳性の育成」
「岩手の先人、歴史、文化を学ぶことを位置付けた教育の構想」をあげております。

本資料「郷土の明日を見据えてく先人の生き方に学ぶ」は、このような考え方や計画に基づき、岩手県の先人を教材として、道徳の時間を中心に活用できるような資料集として作成いたしました。子どもたちには、この資料集を通して、同じ自然と風土で育った先輩の、様々な困難にぶつかりながらも、辛抱強く、あるいは創意工夫をしながら乗り越えていった姿にふれることにより、今の自分と照らし合わせながら自己の生き方についての考えを深めてもらえればと願っております。また、指導される先生方の授業構想に少しでも役立てればということで、それぞれの資料に対応した「指導編」も示しました。

各中学校においては、この資料集刊行の趣旨を十分に理解し、道徳の時間をはじめ、広く活用いただくようお願いいたします。終わりに、本資料集の作成にあたり、ご尽力くださった関係各位に対して心から感謝申し上げます。

平成二十五年三月

岩手県教育委員会 教育長 菅 野 洋 樹

本書の利用について

一、資料編について

- (一) 本資料集は、「人（先人、継承者）の生き方や考え方から道徳的価値を学ぶ」ことを基本的な考え方とし、岩手県出身の先人の生き方についてまとめたものです。主に、「道徳の時間」に活用する資料としてまとめたものですが、それ以外にも、総合的な学習の時間における先人学習や郷土学習などで活用することも考えられます。
- (二) 本資料集は、中学校用として作成しています。岩手の子どもたちにぜひ知ってほしい内容を精選して掲載しています。生徒の実態や年間指導計画に照らし、自由に資料を選択して活用してください。

二、指導編について

- (一) 「指導展開例」は、一般的な道徳の時間の指導過程に基づいて作成していますが、さらに生徒の実態、指導の内容や意図等に応じて発問や展開を工夫してください。
- (二) 事前・事後の指導例についてもふれています。学校教育全体を通しての道徳教育が展開できるようになっています。
- (三) 「参考資料等」は、先生方が、読み物資料の内容の理解を深めたり説話をしたりする上で活用できると思われる事項を補足したものです。指導の参考としてお使いください。

もくじ

まえがき

本書の利用について

第一章 資料編

- 一 日本一の先生
- 二 郷土に産業の灯火を
- 三 復旧にあらず 復興なり
- 四 だからこの海を
- 五 いわたの美をさぐる
- 六 村を救った防潮堤

富とみ
田た

山 やま
奈 な

後藤

小松

吉きつ
川かわ

和村

小一郎

宗 そう
真 しん

新^{しん}
平^{へい}

藤 とう
蔵 ぞう

保^{やす}
正^{まさ}

幸こう
得とく

.....

.....

[illegible]

•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•

•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•

.....

4

8

12

16

20

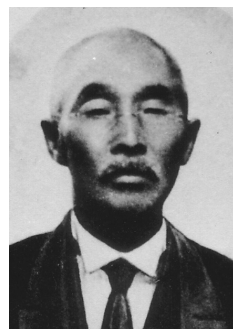
24

第一章

資料編

日本一の先生

富^{とみ}田^た小^こ一^{いち}郎^{ろう}



(「盛岡市先人記念館」提供)

よく叱^{しか}る師ありき
髭^{ひげ}の似^にたるより山^や羊^ぎと名づけて
口^{くち}真^ま似^ねもしき

※いしかわたくぼく
(石川啄木 歌集『一握^{いちあく}の砂』)より

盛岡中学校（現在、岩手県立盛岡第一高等学校）の富田小一郎先生と言えば、授業が非常に厳しいので有名だった。当時の数学や英語の試験は英文で作られ、ある年の試験では、三分の一とも半分とも言われる生徒を落第させたのである。小一郎は、こうした厳しい指導について、「一度や二度落第してへこたれるようでは、偉^{えら}い者にはなれないと信じた結果であった。」と後に振り返っている。

だが、小一郎は、決して厳しいだけの先生ではなかった。

ある年、三年生を担当していた小一郎は、三陸海岸を周遊する修学旅行に出かける。その時の生徒の一人が石川啄木であった。啄木は、その頃から文学に熱中し、勉学をおろそかにしていたため、連日、小一郎に叱^{しか}られていた。啄木は、修学旅行の宿で、なんとご飯を十一杯もおかわりしたが、いつもは怖い小一郎も、この時ばかりは笑っていたという。

また、当時、印刷所で働きながら学校に通う苦学生であった田子^{※たこいちみん}一民^{いちみん}は、授業料や学費に困った時に、小一郎の援助を受けている。かつて小一郎自身も学費に苦労し、一度は大学で学ぶ道をあきらめたことがあった。それでも働きながら苦労を重ねて勉学に励み、教師になったのである。小一郎にとって、目の前の苦学生は若き日の自分自身であった。田子は、後に小一郎について、『真の

教育家』という文字だけでは、私の先生に対する心は満足されない」と語っている。

学力面も精神面も優れた人物を育てることが、小一郎の教育信条であり、成績が好ましくない生徒がいれば補習授業をし、柔道の稽古に励む生徒がいれば一緒に汗を流した。教え子たちは「慈父」という言葉で小一郎を慕っていた。

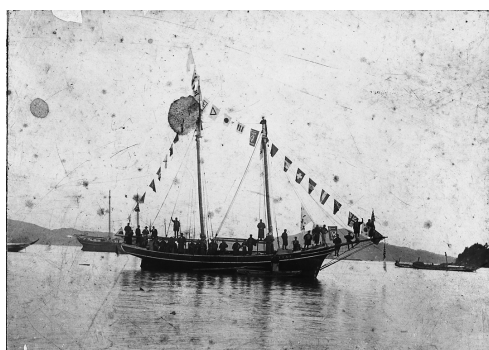
明治三十年（一八九七年）、私立盛岡商業学校が開校された。小一郎は開校当初から、盛岡中学校で先生として教えるかたわら、夜間は商業学校の授業を手伝っていた。そして明治三十二年（一八九九年）ついに校長を引き受けることになった。小一郎は「商業は盛岡市の主要な産業であり、この分野に資する優秀な人物を養成することが大切だ。そのために、商業学校はどうしても必要だ。」と考えていた。

ところが、商業学校の財政はいよいよ苦しくなり、やむなく閉校することになったのである。「ここであきらめるわけにはいかない。なんとかして学校設立の資金を得たい。」

解決方法を考えていた小一郎は、やがて誰もが驚く方法に出たのである。それは、自ら海岸に移り住んで漁業に従事し、船に乗って漁を行うというものだった。小一郎は、気仙郡末崎村細浦港（現在、大船渡市末崎町）を拠点と定め、家族を呼び寄せた。そして、宮城英語学校時代の後輩である三田義正を社長にし、自らは常務になり、三立漁業合資会社を設立し、十九トンの「三立丸」を建造して、意気揚々と大海原へ乗り出したのであった。



盛岡中学校柔道部。中央列右から2人目
（「盛岡市先人記念館」提供）



小一郎が漁に出た三立丸
（「盛岡市先人記念館」提供）

しかし、小一郎の計画は成功しなかった。漁業で学校設立の資金を得るどころか、日々の生活も苦しくなり、妻と三人の子どもを養うためには再就職が必要だった。失意のうちに盛岡へ帰ったが、「米代を払うと銭がなくなる」という小一郎の生涯で最も貧しく厳しい時代となった。それでも、なんとか商業を志す若者の勉学を支えたいとの思いは強く、中学校の校舎の一室を間借りして、昼も夜も彼らを指導し続けた。

やがて、小一郎の願いは現実のものとなった。大正二年（一九一三年）、ついに、盛岡市立商業学校（現在、岩手県立盛岡商業高等学校）が開校され、小一郎は初代校長となったのである。私立盛岡商業学校の校長を引き受けてから、十四年の歳月が流れていた。

小一郎は、続いて女子の商業教育に着手した。当時は、女子が教育を受けることは非常に困難な時代であった。「必ずしも裕福でない家庭の子女にも、より高い教育を受けさせたい。社会的に職業人として自立できる力を与える女子教育が必要だ」という小一郎の女子教育に対する情熱が、私立実践女学校（後の盛岡女子商業学校、現在、盛岡市立高等学校）を誕生させた。

教師陣の多くは、小一郎の理念に賛同した旧知の人物や教え子で、ほとんど無報酬^{むほうしゅう}で授業を受け持っていた。小一郎の信条により、授業料は極めて安く、生徒からの寄附も集めず、生徒の就職には小一郎自ら積極的に出向いて世話をした。それに応えるかのように、卒業生は、各企業や官庁で活躍するようになったのである。

「一人でも多くの子弟に教育の場を与えたい。」

小一郎の志と行動力が、二つの学校の創立につながったのである。

昭和十四年（一九三九年）六月三日。東京赤坂の料亭「幸楽」において、盛岡中学校卒業生が中心となって謝恩会を開催した。そこには、海軍大臣 米内光政^{※よない みつまさ}、陸軍大臣 板垣征四郎^{※いた がきせい しろう}など、盛岡中学校卒業生を中心に、軍人、政治家、実業家など、およそ五十人が集まり、翌日の新聞各紙は、「日本一の謝恩会」「日本一幸福な先生」といった見出しで大々^{だいたい}的に取り上げ、小一郎は一躍^{ととき}時の人となったのである。

教え子の活躍を報道する新聞記事を、一枚一枚丁寧に年月日を記入して写真帳に貼っていたという小一郎にとって、この日はまさに、喜びあふれる幸せな日であったに違いない。



謝恩会写真帳より。前列左から、板垣征四郎、富田、
田中舘愛橘、米内光政（「盛岡市先人記念館」提供）

※石川啄木……歌人・詩人。近代短歌史の中で高い評価を得る。

※田子一民……官僚・政治家。第三十四代衆議院議長。

※三田義正……実業家。三田火薬販売所を設立。

※三立丸……三田義正、斎藤源五郎（高田小学校校長を務め、合資会社では水産加工を担当）、富田の三人の共同出資によることから「三立丸」と名付けた。

※米内光政……海軍軍人・政治家。第三十七代内閣総理大臣。

※板垣征四郎……陸軍軍人。陸軍大臣の後、陸軍大将となる。

※田中舘愛橘……地球物理学者。日本物理学の基礎を築く。その一方で、日本式ローマ字の考案者として知られる。富田とは、ともに藩校作人舘修文所で学んでいる。

郷土に産業の灯火を

山 奈 宗 真



山奈宗真は、江戸時代末期である弘化四年（一八四七年）、武家の長男として遠野に生まれた。

当時、盛岡藩全体の財政は常に火の車だった。度重なる凶作や災害に加え、ロシア軍艦の来航に備えるために、たくさんのお金が必要だったからである。また、毎年続く不作にもかかわらず、藩が重い税を課したため、大規模な百姓一揆が起こったのもこのころである。多くの農民は、その日の食事にも困っていた。

宗真の父は遠野南部家の御勝手役をつとめていたが、新しい考え方をもった武士であった。こうした困窮の中で藩の財政を立て直すには、農民を苦しめる増税ではなく、新しい産業である養蚕や畜産を盛んにして、人々のくらしを豊かにしなければならなかった。宗真はそんな父から、

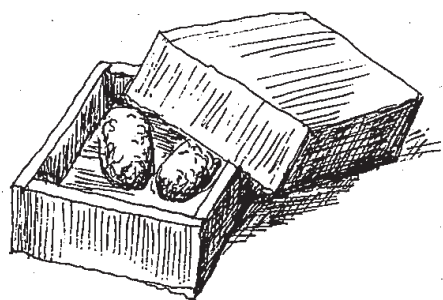
「お前は、産業を学び、農民のために働くことを心がけなさい。」

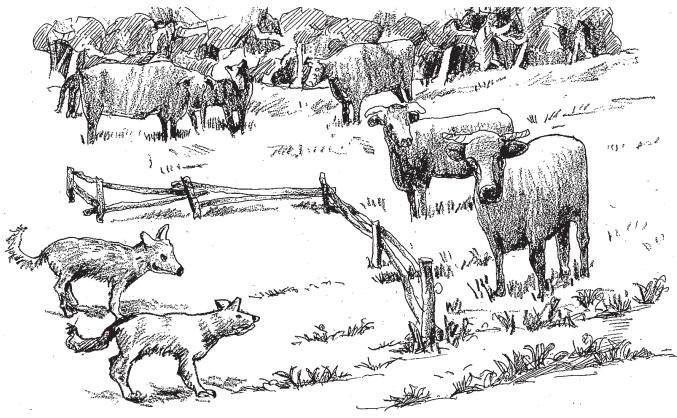
と言い聞かされて育った。十七歳になった年には、父の熱心な指導を受けながら養蚕に挑戦し、たくさんの繭を生産することに成功した。

このときも、

「ひとつのことを成し遂げるには多くの苦労がある。その苦労があつてこそ、成功がある。これからも苦労することを忘れてはいけない。」

と、繭を入れた小箱を父から手渡された。





宗真二十一歳の年、時代は江戸から明治へと変わった。宗真はすでに結婚し、父も病氣のために江戸時代最後の年に亡くなっていた。しかし、時代が変わっても、農民の困窮は変わることがなかった。むしろ、明治維新によって武士さえ職を失うこととなった。翌明治二年（一八六九年）は、大凶作の年となり、食糧不足はさらに深刻なものとなった。宗真は、飢えに苦しむ浪人や農民を見て、「このままではいけない。何とかしなければ……。」と強く思うのだった。

明治三年（一八七〇年）、宗真は一大決心をする。それは「畜産業を学ぶため牧場を開く」というものであった。自ら牧場経営をすることで畜産業を学び、そのやり方を広めて人々の暮らしを豊かにしようと考えたのだ。宗真、二十三歳のことである。家族の理解をえて、家屋や財産をすべて売却して資金をつくり、小国村（現在の宮古市川井）白見山麓に牧場を開いた。

ところが、当時、北上高地にはまだ日本狼が棲息していた。放牧した四十頭のうち、十五頭もの牛や馬が狼の被害にあってしまった。負けてはいられないと、子牛や子馬を生ませ、経営を軌道に乗せようとするが、またまた狼にやられてしまう。ついには、雇っていた牧夫たちが恐れをなし、やめたいと訴えられる事態におちいってしまった。こうして、わずか三年足らずで牧場経営は失敗してしまった。あとに残ったのは、莫大な借金だけであった。

「やはり、私に牧場経営は無理なのか……。」
宗真は、かつて父からもらった小箱をじっと見つめながら考え込んだ。そ

して、ついに、畜産業を学ぶために視察の旅に出ることを決意したのである。借金返済で、残った牛や馬もすべて処分してしまったため資金はなく、自分で旅費を稼かせぎながらの苦難の旅であった。愛する妻や子どもは遠野に残し、二年をかけて、北海道から九州まで全国各地へ足を延のばし、畜産業について多くのことを学んだ。

明治八年（一八七五年）、旅を終えて故郷に戻った宗真は、江えつなぎむら繫村（現在の宮古市江繫）で牧場を再開した。しかし、村との共同経営であったことや、副※ふくこちよう戸長をつとめたり、生活のために測量の仕事を受け負ったりしていたため、自分が思うような経営ができなかった。そこで、宗真は思い切つて安定した生活を捨て、副戸長も辞やめて、土つちぶちむら淵村（現在の遠野市土淵）に個人経営の立丸牧場たちまるを開き、その経営に専念することにした。

さらに、宗真は、畜産業の普及のためには牧場を拡張しなければならぬと思案し、ときの県令（県知事）、島しま惟精これきよに面会し、牛の貸与※たいよを申し出た。



「遠野地方にはこれといった産業がなく、人々は生活に困っております。これらの人々を救うには、新たな産業としての畜産業を広めていく必要があります。そのために、今の牧場経営を発展させていかなければなりません。どうか県から牛を貸かしてください。」

島は、宗真の目をまっすぐ見つめて尋たずねた。

「資金はいくら位あるのか。」

宗真は、胸を張って答えた。

「資金はまったくありません。しかし、私には志を同じにする家族がいま

す。家族が一致協力して働く力こそ、何万の資金に勝ると信じております。」

島は、はじめ驚きの表情であったが、やがて、その思いに感激し、牛十五頭を貸してくれることとなった。これをきっかけに、毎年県から多くの牛を借りることができるようになり、やがて牧場経営は軌道に乗っていった。さらに、明治十五年（一八八二年）には附馬牛村（現在の遠野市附馬牛）に、夫婦で六十日間も山ごもりして大野牧場を開いた。こうして、宗真は「ベコ※の宗真」と呼ばれるようになり、畜産業の第一人者として道を歩むこととなった。

宗真は、畜産業ばかりでなく、産業を学ぶきっかけとなった養蚕や、ブドウ、ホップ、キャベツ、トマトといった当時としては珍しい商品作物の栽培や、植林にも取り組んだ。そればかりではない。産業振興に取り組む中で教育の重要性を痛感し、日本で初めての私立図書館も開設した。これら数多くの事業は、その後の郷土発展の礎いしずえとなった。まさに、宗真は、遠野、そして岩手の産業振興の先駆者※せんくしやとなったのである。

このように、宗真の生涯は、郷土に産業の火を灯ともしたいという信念に貫つらぬかれた人生であった。

※御勝手役……当時の役職名で、今の会計担当にあたる。

※養蚕……蚕かいこを卵から育てて繭まゆをとること。繭は絹の原料となる。絹は当時、貴重な織物おりものであった。

※牧夫……牧場で牛や馬の世話をする人。

※副戸長……明治初期に町村に置かれた役職。町村の代表という性格をもった。

※貸与……貸し与えること。ここでは、岩手県から牛や馬を借りることをさす。

※ベコ……「牛」のことをさす方言。

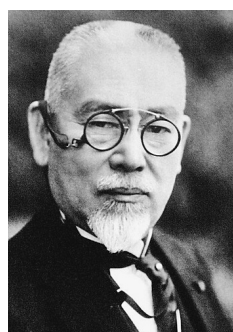
※私立図書館……「信成書籍館」という。私財を投げ打って書籍を購入して備え、希望する一般の人々の閲覧に供した。

※先駆者……人に先がけて物事をなす人。

復旧にあらず

復興なりふっこう

後藤新平ごとうしんぺい



大正十二年（一九二三年）九月一日、午前十一時五十分、関東地方に大地震が発生した。世に言う関東大震災である。地震後に発生した火災で、東京と横浜では市街地の大半が消失し、特に東京においては、都心部と下町のほぼ全域が焼土と化した。死者・行方不明者は、十万人に達する大災害であった。

このような大災害から、大胆な計画で東京を復興に導いたのが、岩手県出身の後藤新平である。



大震災により焦土となった東京
（「後藤新平記念館」提供）

後藤新平は、安政四年（一八五七年）、陸奥国胆沢郡塩釜村（現在の奥州市）に生まれた。幼少より学識が高いことで知られ、十三歳になると、のちに内閣総理大臣となる同郷の斎藤実とともに、胆沢県庁に職員として抜擢ばってきされるほどであった。十八歳になった新平は、医者を目指して福島の医学校に入学し、二十五歳には愛知県で医学校長兼病院長となった。その後、国の機関である内務省衛生局に採用されると、

「社会は、人と人とのつながりが人体のように機能することで発展する。国家は、人の生命を衛まも（守る）ようにしなければならぬ。」

と述べ、今度は政治の面から国民の安全を衛まも（守る）ため、強い意志と実行力で日夜奔走ほんそうした。新

平は、「国家を治す医者」を目指したのである。

そんな新平が、内務大臣（警察や土木等の担当）兼帝都復興院総裁に就任したのは、大正十二年（一九二三年）九月二日、大震災の翌日である。

「自分がやるべきことは何なのだろうか。」

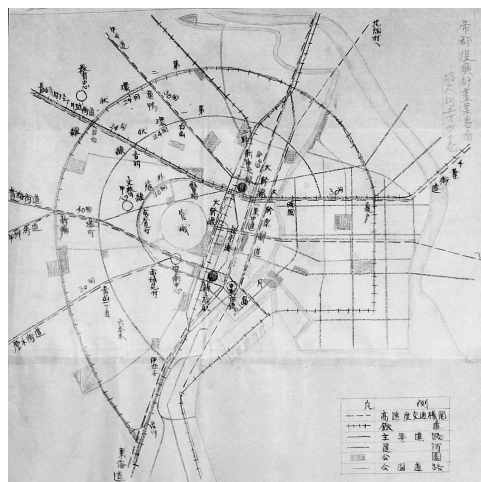
目の前に広がるのは、焼け野原と化した首都東京の姿であった。人々は住む場所はもちろん、着替えもなく、食料さえなかった。しかし、新平は、その悲惨な状況に立ち止まることなく、震災復興計画の立案に着手した。新平と復興計画を推進するチームは、一日の睡眠時間約三時間という中で、調査、検討を繰り返した。そして、震災からわずか三か月という速さで完成させた『東京復興の議』として発表された復興案の概要は、次のようなものであった。

※せんど 遷都はせず、東京に復興費三十億円をかけて、欧米のような広い道路や公園を備える最新計画を適用した首都を再建する。その都市計画のために焼土を地主から買い上げる。

※しんぎかい しかし、審議会では、新平の考えた案に賛成する者はほとんどい

なかった。審議会の委員からは、「国家の財政が苦しいときに、このような巨額の予算を計上するのは暴挙である。」という発言に始まり、※おわぶろしき 「大風呂敷」と批判も受けた。そして、「計画の縮小」や「新道路計画の放棄」が声高に叫ばれた。多くの地主からも、土地を収用されるということで強い反対運動が起こった。それでも新平は、このような批判に対し、

「復旧にあらず、復興なり」



手書きの計画図
（「後藤新平記念館」提供）

と主張した。首都東京を単に震災前の姿に戻す「復旧」ではなく、都市機能を拡充し、このような大震災から人の生命を衛（守る）ことができるような都市として「復興」させることの重要性を訴えたのである。

結局、「復興」の考え方は理解されず、ついには反対派の力によって復興院の事務費をゼロにされ、「復興計画」の大幅な修正をも余儀なくされる事態となった。

復興の計画さえ進まないこの状況を知った親友のピアード教授は、「世界は新平に注目している。この計画を死守しなければ、十年ないし五十年後に再び起こるかもしれない第二の危機は、さらに被害が広く、大災害を誘発する。人命財産を防衛するのに足りないような小さな計画を立てるのは、愚かな行為である。案が通らないなら辞職すべきだ。」という手紙を新平に送った。

この手紙を読んだ部下は、新平に対して涙を流しながら口々に叫んだ。

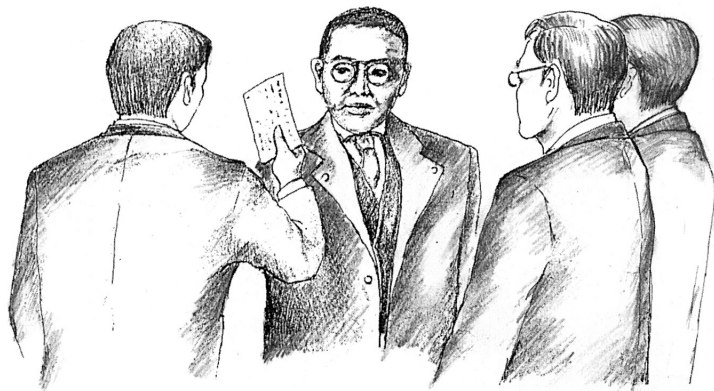
「この手紙を読みましたか。計画通りに復興を断行しましょう！」

「反対派となぜもっと闘わないのですか。この計画を通さなければ、世間から後藤、破れたり！と言われてしまいます。」

新平は静かに、そして一つ一つの言葉をかみしめるように言った。

「自分の政治家としての面目や地位などはどうでもよい。今、自分が反対派と闘って辞職したらどうなる。東京の復興はさらに遅れるばかりではないか。」

こうして、いつもであれば感情的になり、自分の意見を通す新平であったが、復興予算の削減や計画の修正を受け入れることを決断した。これからの東京の本当の意味での復興を考えると、新平



は、これを最善だと判断したのだった。

大正十二年（一九二三年）十二月、震災からわずか四か月足らずで本格的な復興事業が開始された。復興計画は大幅に縮小されたものの、長年の東京の課題であった都市改造を実現した。避難場所ともなり得る広い隅田公園、広い道幅によって火災の延焼を防ぐことができる昭和通り、地震に強い鉄筋コンクリートでつくられた小学校や橋など、「衛生と防災」に配慮した街が、ついに完成したのである。

昭和五年（一九三〇年）三月二十六日、復興完成式典が開かれた。しかし、そこには新平の姿はなかった。復興の完成を待たずして式典の前年に死去したのである。

現在、東京は世界都市とも言われ、人口が千二百五十万人を超えている。そこにみられる幹線道路網の大きな部分は新平の計画によって造られたものである。今の東京の発展は、新平の復興計画の上に成り立っているのである。



復興後の江戸橋付近の昭和通り
（「後藤新平記念館」提供）

※遷都……………首都を他所へ移すこと。

※復興費三十億円……………当時の国家予算の二倍の額であった。

※審議会……………議会で決定する前の段階の会議のこと。

※大風呂敷……………常識的に見てとうてい実現不可能と思えるような大計画を立てて、人々に吹聴すること。

※ピアード教授……………アメリカ人で元コロンビア大教授。後藤新平が東京市長（知事）の時に来日してアドバイスを送った人物。

だからこの海を

小松藤蔵



大船渡市にある景勝地、『碁石浜』を見渡す一角には、わかめ養殖漁業の先駆者であり、人生の大半を郷土の海の発展に尽くした小松藤蔵の業績を讃える二つの碑が建てられている。藤蔵が最初にわかめ養殖を始めた漁場を一望できるということで、平成

十九年（二〇〇七年）に地域住民が記念碑と顕彰碑の二碑を建立したのであった。

それから四年後の平成二十三年（二〇一一年）三月十一日、東日本大震災津波が発生し、岩手県内の水産業は壊滅的な被害を受けた。多くの人々が途方に暮れていたが、漁業関係者は一致結束して立ち上がり、復興再建を目指し、わかめの養殖に希望を託した。晩秋に種をまけば、豊かな海の恵みを受けて、翌年の早春には収穫ができるのだ。海にはかつてのように養殖の浮き玉が力強く浮かんだ。

そして、待ちに待った翌年三月、復興の光ともいえるわかめが収穫された。藤蔵が生涯をかけて郷土に残したわかめ養殖の技術が、今回も生かされたのである。

第二次世界大戦後、漁村の人々の生活は貧しいものであった。漁民たちは、年によって出来不出来があり生産が安定しない天然の海産物に、その家計の大部分を頼っていた。特に、天然のわかめが採れる磯は限られたものであり、漁民たちは手漕ぎ船で磯場に行き、冷たい海水に長時間浸かりながら、海底に生えているわかめを鎌で刈り取るといった重労働をしいられていた。



碁石浜の一角に建つわかめ養殖発祥の記念碑と顕彰碑

兵役の後、出身地である気仙郡末崎村（現大船渡市末崎町）に戻り、海苔の養殖等の漁業を営んでいた藤蔵は、目の前に広がる青々とした海原と、精一杯働く漁民たちの姿を黙って見つめていた。

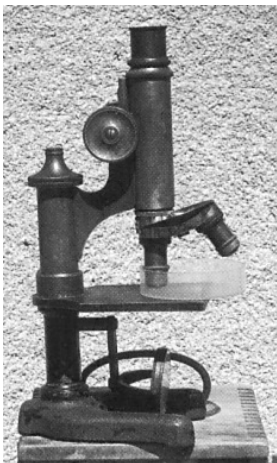
「安定しない天然わかめをあてにするより、わかめも養殖によって、良質なものを大量に生産できるようにするはずである。浜の暮らしも必ずや良くなるに違いない。」

このように考えた藤蔵は、昭和二十八年（一九五三年）、貧しい漁民の生活の改善に向け、私財を投じて、天然わかめから人工的にわかめの種苗を生産する研究に着手した。このとき、藤蔵は三十七歳であった。すでに外洋における海苔の養殖を成功させており、その技術と方法については自信があったことも藤蔵を後押ししていた。

しかし、当時の養殖に関わる資材は今から考えると非常に粗末な物であり、必要な道具は自作しなければならなかった。藤蔵は何もかも手探りの中、わら縄をコイルタールで染めて養殖の縄を作るなど、様々な工夫を重ねた。また、わかめの孢子などを観察し、多くのデータを地道に集めた。その観察には顕微鏡が必要であったが、なかなか手に入れることができなかったため、隣町にあった水産試験場まで足しげく通い、顕微鏡を見つめ続けた。

周りの漁師は、そのような藤蔵を初めは変なものでも見るような目で眺めていたが、少しずつ成果が上がってくると、一人また一人と藤蔵に協力する者が増えていった。数々の失敗を伴いながらも、郷土の海に一途な思いをもって研究し続ける藤蔵の姿は、周りの人々の心をつかんでいくのであった。

そのような試行錯誤の末、藤蔵は、ようやくわかめ養殖技術の研究を確立したが、その成功に留まることなく、すぐさま次の段階に取り



藤蔵が使用したドイツ製の
高価な顕微鏡

組んでいった。

「個人個人が養殖に精を出しても限界がある。わかめ養殖を企業化[※]させることに成功すれば、我が郷土の海は人々に様々な恩恵を与え、浜の生活はさらに安定したものとなるであろう。漁民みんなが豊かに、そして、幸せにこの地で暮らすことが出来ればよい。」

そう考えた藤蔵は、企業化することの意義を漁業関係者たちに伝えるために勉強会を開催し、理解を得ることに力を尽くした。説得は困難でまた時間を要することとなったが、わかめ養殖の将来性に着目した漁民たちが徐々に賛同^{さんどう}したことによって、念願の企業化が現実のものに近づいていった。

研究に着手してから四年の年月が流れた昭和三十二年（一九五七年）、藤蔵は、ついに「つくり育てる」養殖技術と体制を生み出した。感情をあまり表に出さない藤蔵も、このときは研究や活動をしてきた仲間とともに、どんどん込み上げてくる思いを胸に喜び合ったという。

藤蔵が生み出したわかめ養殖の基盤は、こうしてやっと漁民に根付くことになり、安定的なわかめ生産と漁民の重労働の解消が実現し、水産業の発展につながっていくことになるのである。

しかし、無難にいきそうな養殖わかめも、自然災害から逃れることはできなかった。台風や大波など、日常よく起こる自然災害でもわかめが施設から落とされ、ロープだけ残るといった困難も度々であった。特に甚大な被害を受けたのは、昭和三十五年（一九六〇年）に起きたチリ地震津波によるものであった。養殖施設は跡形もなく流されてしまい、藤蔵や漁民たちは、その被害の大きさにぼうぜんとするしかなかった。それでも藤蔵をはじめとする人々は、様々な被害にめげることなく、そのつど養殖施設の修復、改良に取り組んだ。苦勞の連続ではあったが、藤蔵たちの郷土の海に対

する思いは、ますます熱いものとなっていたのである。

藤蔵は、困難なことがあると「人の血の成分は海の成分と同じ。だからこの海を大切にしなければならないのだ。」と周囲によく語っていたという。

藤蔵が築いたわかめ養殖技術は、県内各地の漁業関係者が受け継ぎ、さらに改良、発展させ、生産量は増大していくこととなる。藤蔵自身は、水産業界の要職を数多く歴任したが、立場が変わっても、漁業の発展に貢献し、郷土の海に対する思いを生涯絶やすことはなかった。

今日、岩手県は日本一のわかめ生産地として、全国に名が知られるようになった。国内のわかめ生産のおよそ四割を岩手県産が占めており、郷土の海とともに生きる沿岸漁民の重要な生産部門として、その生活を支えている。

ひたすら漁民とともに苦しみや喜びを分かち合い、自分のことよりもまず、郷土やそこに住む人々に奉仕した藤蔵。その分身でもある碑は、今日も豊かな海原を静かにじっと見つめている。

※種苗……………わかめの胞子を細い糸に付着させ葉体が数センチメートルになるまで成長させたもの。

※コーラルタール……………石炭を蒸留したときに生成する茶褐色または黒色の粘りけのある液状物質。
ちやかっしよく

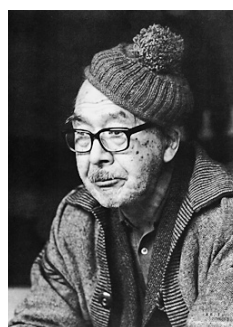
※企業化……………複数の漁民が生産手段等を共有し、漁業経営、販売を共同で行うこと。



小松藤蔵の顕彰碑

いわての美をさぐる

吉川保正



チヤグチャグ馬コの手綱引きや観光バスガイドの装いとして、今でもよく目にする雫石あねこ姿。野良着であったこの装束をはじめ、郷土の無名の職人による民芸の美を発掘し世に紹介したのが、岩手出身の彫刻家である吉川保正でした。

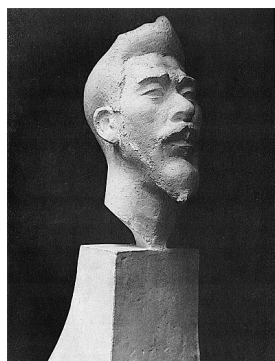


雫石あねこ

「テイテントレタ イワマニモツタエテクレ」

保正は、大正一〇年の帝展（政府主催展覧会）で念願の入選を果たし、郷里の姉に電報を送りました。イワマとは保正の養母です。明治二十六年、重茂村（現宮古市）に生まれた保正は、幼い頃に明治三陸大津波で母を亡くし、その数年後には父も他界していました。

二十歳の春に彼は、「絵描きなんぞまともな人間になるものではない」という周囲の声を押し切って上京し、東京美術学校（現東京芸術大学）で近代彫刻を学びました。西洋の彫刻が作家個人の自由な表現として、ようやく認められるようになってきた時代でした。彼は、ひたすら対象を見つめ、自己に向き合い、新しい美を求めて制作に励みました。そして、二十八歳にして



自刻像（1922年）

ついに彫刻家として世に認められたのです。翌年に発表した「自刻像」は、その技量と作品の精神性が評価されて文部省買上げ第一席となり、彼は彫刻家としての名声を確かなものにしたのでした。それから保正は、中国雲南省の美術専門学校の教授として大陸に渡り、地域の美術調査にも従事

しました。そして二年後に帰国し、商工館（現岩手県工業技術センター）の商工技手として、郷里岩手に迎え入れられたのでした。

彫刻家として成功し岩手に戻った保正は、この頃、柳※やなぎ むねよし宗悦が提唱した『民芸運動』に出会います。柳は、無名の職人による民衆的美術工芸の美を発掘し、世に紹介しようとしていました。

「民芸の手仕事の価値は、有名無名を問わずただその品物にある。作り手はその名をとどめずこの世を去っていくが、親切にこしらえた品物の中に、彼らがこの世に生きていた意味が宿る。」

この言葉に出会ったとき、保正は、はっとさせられました。それは、独創性を追求し名を成そうとする作家的作風の対極にある、「無心の美」とでも言うべき考え方です。西洋美術を学び、作家として作品を世に問う道を歩んできた彼は、驚きの念を禁じ得ませんでした。

「民芸には本当に価値があるのか、論より証拠となる品をこの眼で確かめなければならない。」

彼はそんな強い思いにかき立てられ、県内各地にどんなものがあるのか訪ね歩くことにしたのでした。

しかし、そう易々とその答えは見つかりません。近代化の波は中央から遠いみちのく岩手にも及び、日用品の多くは手作りのものから機械製のものに取って代わられつつありました。これまで使い慣らしたもののへの愛着はおろか、日々の暮らしから手仕事の価値が忘れ去られようとしていたのです。伝統の塗り物を求めて老舗しにせの漆器屋しっきを訪ねても、

「古くさい時代もののお椀わんなんぞ、もう川に流して捨ててしまった。」



民芸品を調査する保正

と言われる始末でした。それでも保正は茅葺^{かやぶき}屋根の古民家や古い寺を訪ね歩き、屋敷の奥にしまい込まれていた衣服や食器、仕事のための用具などをくまなく見て回りました。

そんな彼が、県南地方を訪れた時のことです。江戸時代より前に作られたというお椀を手に取りじっと見つめた保正は、その古びたお椀から、最近の売り物にはない、真面目^{まじめ}で力強い気風が伝わってくるのを感じました。それは『秀衡椀^{ひでひらわん}』^{ひでひらわん}と言ひ伝えられているものでした。いつ、どこで作られたものであるかは知る由もありません。しかし、奥州藤原氏の時代に端を発すると思われるその技が、歴史の変遷^{へんせん}と興亡^{こうぼう}を乗り越え受け継がれてきたことは確かです。どっしりと安定した形。たつぷりと塗り重ねられた漆^{うるし}。源氏雲^{げんじぐも}に菱紋^{ひしもん}と松竹梅などの吉祥文様^{きつしょうもんよう}。一族の繁栄を願い丹精^{たんせい}込めてつくられ、長年大事に使われてきたこの椀に、保正は、人々の暮らしに根ざした深く豊かな美しさを見たのでした。

それからの保正は、伝統工芸と言われるものばかりでなく、庶民が農耕生活の中で使ってきた装束や道具にも目を向けるようになりました。それは、自然を相手にした仕事と暮らしにはどこか正直で健康なものがあり、そこで作られ使われ続けているものには、真面目で念入りな手仕事の性質が宿るに違いないと思ったからでした。

実際、保正は、遠野や九戸、雫石の「みの」、「けら」と言われるものに目を奪われました。これは、古来からある外套^{がいとう}、あるいは羽織^{はおり}にあたるものです。その地域でとれる材料を生かし、使う人の身を守るため厚く念入りに編^あまれています。特に手の



遠野市小友地方のまだけら



松・笹模様の秀衡椀

込んだ首元の編み込み文様には魔よけの意味もあり、雨や雪をしのいで無事に帰ってくるように祈りを込めて作られたものです。彼はそこに、

「手仕事の背後にはいつも、責任と思いやりが控えている。」
という民芸の本質を見たのでした。

このような手仕事は、自然の恵みと先祖から伝わる知恵や経験に支えられ、その技に人々の願いが刷り込まれ、その土地固有の伝統となっていたものです。それ故保正は、民芸に個人を越えた郷土の文化の価値を確信するようになりました。彼は言います。

「民芸に限らず、我々は岩手の先人が築いたいろいろな文化、あるいは文化感情を大事にしなければならぬと思う。中央文化の導入も大切には違いないが、岩手という風土から生まれた文化を守り、生み出していかねければ、岩手はいつまでたっても後進県というレッテルをはずすことは出来ないだろう。」



吉川保正著書「美をさぐる」

生涯「美」をさぐり続けた吉川保正は、絵、彫刻、民芸と次第にその仕事の領域を広げ、その半生を仏像、面、郷土芸能、宗教など多岐にわたる研究に捧げました。中でも、彼が探し出した岩手の民芸の手仕事は、岩手の風土が育んだ先人たちの心の仕事であったことを教えてくれます。岩手の文化に誇りをもち、その価値を見直していくことの必要性を説いたその精神は、今でも多くの人々に受け継がれています。

※民芸……日常的に使われる工芸品のこと。

※柳宗悦……美術評論家・宗教哲学者。民芸運動の提唱者として知られる。朝鮮で「三・一独立運動」

が起こったとき、その運動に共感し、日本の朝鮮に対する植民地政策を批判した。

村を救った防潮堤

和村幸得



平成二十三年（二〇一一年）三月十一日、普代村は東日本大震災津波に襲われた。漁港や漁業関係施設は壊滅的な被害を受けた。しかし、死者・行方不明者はほとんどなく、家屋にも被害はなかった。村は防潮堤と水門に守られたのである。震災時、必死で水門のゲートを閉めた村の消防士は、後にしみじみと語った。

「水門の高さがもう少し低かったら、村にはものすごい被害が出ていただろう。もちろん私の命もなかった。」

津波は水門に衝突して乗り越え、水門脇の山肌を切り崩したものの、水門近くの普代小学校の前で止まった。過去に津波の被害が大きかった太田名部地区^{おわたなべ}も、防潮堤が津波を食い止め被害はなかった。村民の命と家屋を守った防潮堤と水門、その高さは十五・五メートル。完成まで導いたのは、元村長 和村幸得である。

村長になった和村には、忘れられない出来事があった。

昭和八年（一九三三年）三月三日、午前三時頃。和村はかつて経験したことのない強震に目を覚ました。三十分位すると、沖の方から「ゴォー」という音がしたので、取るものも取らず裏山にかけ登った。振り返って見ると、普代の街は波で一面真っ白^{しろ}になっていた。恐ろしさと寒さに身を縮めながら一夜を過ごした。夜が明け、一番被害が心配されていた太田名部地区に向かった。険しい峠を越え地区が見えるところまで行くと、和村は目を疑った。かつて密集して建てられていた家屋^{かおく}

は一軒も残っていなかった。積もった土砂の中から、家族や友人を
探す姿があちこちに見られた。

「阿鼻叫喚※あびきようかんとはこのことか。」

和村は、言葉も出なかった。これが、昭和三陸津波である。

村は過去にも大きな津波に襲われていた。明治二十九年（一八九
六年）の明治三陸津波の際には、千人を超える死者・行方不明者を
出し、流出倒壊家屋も二百五十八戸を数えるなど壊滅的な被害であっ
た。大きな災害の前に、家屋をはじめ、働いたための大事な漁業施設
や道具、そして、多くの尊い命までもが失われたのであった。

「二度あることは、三度あってはならない。」

和村は、津波から村民の命と家屋を守ることを心に誓った。

まず、津波研究所や先進地に出向き、普代村の地形や海岸に合う

ような津波被害を防ぐ方法は何かを研究をした。その研究成果が、太田名部地区への防潮堤と普代
川への水門の建築であった。それには多額の費用がかかることから、県や国からの支援を受けるこ
とが必要であった。そこで、県の土木部に陳情ちんじやうを重ね、建設省にも粘り強く働きかけた。また、建
築予定場所は国立公園の指定や河川の規制があり、その解除にも尽力した。

その結果、とうとう念願の建築計画が動き出した。和村は一緒に奔走ほんそうしてくれた村職員と、手を
取り合って喜んだ。



昭和三陸津波後の太田名部部落の津波災害状況

しかし、喜びは一瞬にして落胆に変わった。県から示された防潮堤の高さは十四メートルであったのである。

「何が何でも、十五メートル以上でなければならぬ。」

と、和村は心の中で叫んだ。明治の津波の高さは十五メートルである、村では言い伝えられてきたからである。だがここで、高さを変えてくれと主張すると、せっかく動き出した計画が中止になるかもしれない。

さらには、村議会の中からも、

「そんなに高くする必要はあるのか。」

「津波なんか、本当にくるのか。」

などの反対意見が出てきた。村民の中からも、

「その建築資金を他のことに使えばいい。」

「建築のために土地を譲^{ゆず}れだど。先祖代々の土地は譲れない。」

などの反対の声が次々とあがった。動き出した建築計画は大きな壁にぶつかった。

和村は、その必要性を理解してもらうために、あらゆる努力を続けた。

まず、高さを十五メートル以上とするように、県などに繰り返し働きかけた。次に、村議会へ事業の意義を説明し続けた。村民へも直接説明を繰り返し続けた。さらに、土地を譲ってくれない村民に對しても、和村や村の職員は何度も足を運び、碁を打ったり世間話をしたりする中で、防潮堤建築の必要性を必死に説いた。それでも、全ての村民の理解を得ることはできなかった。



「これだけ説明してもだめなのか。防潮堤建築はあきらめた方がよいのだろうか…。」

美しい普代の自然と街を眺めながら、和村は悩んだ。そのとき、和村の脳裏に、昭和三陸津波の際に見たあの光景が浮かんだ。

「やはり防潮堤は絶対に必要なんだ。建築推進だ。」

こうして、和村は、建築に必要な行政手続きを推し進めることを決断する。そして、ついに、県からの建築許可を得たのである。

昭和四十二年（一九六七年）、太田名部地区に防潮堤が、昭和五十九年（一九八四年）には、普代地区に普代水門が完成した。その高さは、和村が一貫して主張してきた十五メートルを超える、「十五・五メートル」であった。

四十年間務めた村長を退任する際、次のような言葉を残している。

「村民のためと確信をもって始めた仕事は、反対があっても説得してやり遂げてください。最後には理解してもらえる。これが私の置き土産です。」

東日本大震災津波から半年後の九月。普代の秋祭りは、規模こそ縮小したが、にぎやかに行われた。祭りの笛の音は、幾多の試練を経ながらも、村民のことを第一に考え事業を推進した和村村長に、感謝の気持ちを伝えているようであった。そして、和村が静かに眠る墓には、その功績をしのび、村民をはじめ多くの人々が訪れ、美しい花が絶えることなく手向け^{たむ}られている。

※阿鼻叫喚……悲惨な状況におちいり、混乱して泣き叫ぶこと。

6 参考資料等

【和村幸得略歴（1909～1997年）、関係事業等】

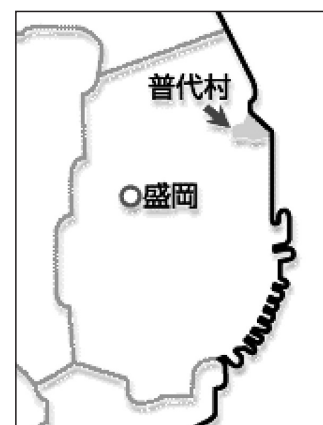
年号	西暦	主 な 出 来 事
明治	29	1896年 明治三陸津波 普代村の被害～千人を超す死者行方不明者、流出倒壊家屋257戸、津波の高さは15メートルを超えると村では伝えられてきた。
	42	1909年 2月21日 普代村に生まれる
昭和	8	1933年 3月3日 昭和三陸津波 普代村の被害～137人の死者行方不明者、流出倒壊家屋201戸 (和村は当時24歳)
	22	1947年 普代村長初当選（38歳）～10期40年にわたり村長を務める
	42	1967年 太田名部防潮堤（総延長155メートル、高さ15.5メートル）完成
	59	1984年 普代水門（総延長205メートル、高さ15.5メートル）完成
	62	1987年 4月30日 村長退任
平成	9	1997年 死去（88歳）
	23	2011年 3月11日 東日本大震災津波

【普代村】

岩手県沿岸北部に位置する人口3千人あまりの村。陸中海岸国立公園に指定されており、漁業を中心とした産業が盛ん。北緯40度線が通り「北緯40度の地球村」をキャッチフレーズとして、グローバルな村づくりを進めている。

【参照したホームページ等】

- ・ 普代村ホームページ
- ・ ウィキペディア「和村幸得」、「普代水門」



2011.3.20 普代水門写真



2011.3.11 太田名部防潮堤を襲う津波

(2) 本時の展開例

過程	主な学習活動と発問 (○) ※主発問(◎)	期待する生徒の反応	指導上の留意点、資料 (■)
導入	1 「目標を立て、達成できたことやできなかったこと」について、経験を出し合う。	- 部活で優勝を目指してみんなで励ましあって練習したら、優勝できた。 - 毎日2時間の勉強をしようとしたが、眠くてできなかった。 - 文化祭に向け合唱の朝練習をしようとしたが、友達から遊びに誘われ休んでしまった。	自分のがんばりや弱さに気付かせながら、本時の価値への動機付けとしたい。
展開	2 資料を読んで、和村の気持ちや行動について話し合う。 ○ 和村が太田名部地区の津波被害を見たとき、どんなことを思ったのでしょうか。 ○ 防潮堤と水門の建築に反対の声があがったとき、和村はどんな気持ちだったのでしょうか。 ◎ 「建築推進」を決めた和村には、どんな思いがあったのでしょうか。 3 把握した価値と自己とのかかわりを考える。 ○ 和村の生き方から、自分が感じたことや学んだことを書いてみましょう。	- 家がなくなり、悲惨である。 - みんな生きていてほしい。 - 地獄のようで何も考えられない。 - 二度とあってほしくない。 - 他のことにお金を使った方がいいか。 - 津波は本当に来るのだろうか。 - 村の人の声は重い。 - それでも防潮堤は必要だ。 - あの悲惨な津波被害を見たくない。 - 村民の反対があっても、村民の命を守るためには建築推進をするんだ。 - 不幸が3度あってはならない。だからこそ、やりぬくしかない。 - 郷土のこと考え、困難があってもやりぬくことの大事さを学んだ。 - 目標を達成するには、苦労があっても信念をもって行動することが必要だ。	■写真「和村の写真」「普代水門、防潮堤」 ■挿絵「津波災害状況」 - 写真から具体的なイメージをもたせたい。 ■挿絵「悩む和村」 - 村のことを思った計画に村民の反対の声を受け、葛藤する和村に共感させたい。 - 郷土を守りたいという和村の信念から、困難があってもやり抜こうとしたことをとらえさせる。 ■道徳シート - 和村の強い信念があったことを踏まえ、自己との関わりを考えさせる。
終末	4 和村が退任の際に、「反対があってもやり遂げてください。」といった言葉について考え、教師の説話を聞く。		和村の言葉から、強い意志をもってやりぬくことの大切さを考えさせたい。

(3) 事後の教育活動

生徒会活動や学級活動での内容(1)ウ「学校における多様な集団の生活の向上」等との関連を図り、道徳的实践につながる場を位置付ける。

総合的な学習の時間で、岩手の先人について調べる活動を行う。

1 ねらい

困難な状況でも高い目標をもち、強い意志をもって自分ができることをやりぬこうとする心情を育てる。

【1－（2）強い意志】

2 資料について

（1）内 容

本資料は、東日本大震災津波から普代村民と家屋を守った「太田名部防潮堤」と「普代水門」を建築した元村長 和村幸得の話である。和村村長は、過去2回の大きな津波の被害から、15メートルを超える高さにこだわり、完成まで導いた。郷土の普代村を守るため、「2度あることは3度あってはならない」という信念で、建築に向けて県への粘り強い働きかけをし、村民らの建築反対の声に悩みながらも、目標を達成したのである。自身の津波体験から村民を守りたいという思いや郷土の未来を見すえ、困難があっても強い意志や信念で建築を推進した先人の生き方を追体験しながら、価値に迫らせていきたい。

（2）指導上の留意点

- 導入では、生活の中で目標を達成したり、やろうとしたができなかったりした経験を振り返らせることで、資料への興味や価値への方向付けを図っていく。
- 展開前半では、和村自身が経験した昭和三陸津波の普代村の状況についてふれ、和村のつらさに共感させ、郷土の未来を見すえる動機となったことに気付かせたい。
- 展開後半では、防潮堤などの建設に反対の声があがり、苦悩する和村の心情に共感させたい。
その上で、困難があっても村民のことを思い信念をもって建設を推し進めた和村の強い意思や目標達成に向けてやり抜いたことを考えさせることで、本時のねらいに迫っていきたい。

3 他の教育活動との関連

（1）各教科

- ・社会 第2学年「日本の諸地域 東北地方」「身近な地域の調査」

（2）総合的な学習の時間「岩手の先人」

（3）特別活動「学校行事」「生徒会活動」

4 出典及び参考文献

- ・広報ふだい縮小版、縮小版Ⅱ（普代村 昭和56年12月発行、平成5年7月発行）
- ・広報ふだい（普代村 平成23年4月号～平成24年7月号）
- ・「貧乏との戦い四十年」（和村幸得 昭和63年11月10日）

5 指導展開例

（1）事前の教育活動

社会科、東北地方の文化や身近な地域の調査を学習してきたことをもとに、郷土の文化や歴史について興味をもたせる。

また、学級会活動で、目標をもつことの大切さを話し合わせる。

6 参考資料等

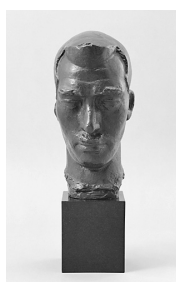
【吉川保正略年表】

年号	西暦	年齢	主 な 出 来 事
明治	26	1893年	下閉伊郡重茂村（現 宮古市）に生まれる
	29	1896年	3 歳 三陸大津波により母と兄が死亡
	35	1902年	9 歳 父が死去
	41	1908年	15歳 岩手県立盛岡中学校入学
大正	2	1913年	20歳 盛岡中学校 5 年修了、上京
	6	1917年	24歳 東京美術学校彫刻科入学
	10	1921年	28歳 第 3 回帝展に初入選（以後第 6 回まで毎年入選）
	11	1922年	29歳 東京美術学校彫刻科卒業制作「自刻像」文部省買上げ第一席
昭和	2	1927年	34歳 中国雲南省美術専門学校教授となる 雲南省美術調査に従事する
	4	1929年	36歳 帰国し岩手県商工館に商工技手として勤務
	5	1930年	37歳 第12回帝展に「自像」を出品、入選
	6	1931年	38歳 柳宗悦の東北地方民芸調査に同行（以後たびたび柳の調査に協力）
	8	1933年	34歳 岩手県工業試験場金工部長となる
	23	1948年	55歳 岩手県重要美術品等調査委員となる
	26	1951年	58歳 岩手県立盛岡短期大学講師となり、技術生活美学を担当する
	27	1952年	59歳 岩手県文化財専門委員に就任（～昭和51年）
	28	1953年	60歳 柳宗悦、バーナード・リーチの東北地方民芸調査の案内を務める
	39	1964年	71歳 岩手県教育委員会から文化財保護の貢献により教育表彰
	40	1965年	72歳 市勢振興功労者として幅広い文化活動の功により表彰
	41	1966年	73歳 岩手県立盛岡短期大学教授となる（～昭和52年）
	45	1970年	77歳 文化財功労者として文化庁長官表彰
	49	1974年	81歳 文化財保護の功績により勲五等双光旭日章を授章
	54	1979年	86歳 「彫刻七十年の足跡—吉川保正展」が盛岡で開催される
	56	1981年	88歳 「美をさぐる 吉川保正 作品と著作集」刊行
	59	1984年	91歳 盛岡市で死去 報恩寺に眠る

【岩手の民芸運動】

1934（昭和9）年頃から吉川保正や及川善三（花巻市出身の染色家・ホームスパン作家）、及川四郎（光原社創業）などを中心に推進された。秀衡椀や南部椀、浄法寺椀、岩泉町の紫根染、一戸町鳥越の竹細工、そして雫石や玉山の野良着といった、岩手を代表する民芸品はこの頃にその価値を見出され、全国的に知られるようになった。

【彫刻・絵画】



自像（1930年）／岩手県立美術館所蔵

舟越保武の彫刻への道を決定付けたといわれる保正の作品。舟越は、「バリッとした面をもったどしんとした首だった。それまでは思いもよらなかった量（マッス）の力みみたいなものを感じて、彫刻とはこういうものだと思った。実際に彫刻を作りたいと思ったのはその作品を見たときだった。」と言っている。

【岩手の文化・伝統工芸を紹介するウェブサイト】

<http://www.bunka.pref.iwate.jp/dentou/kougei/index.html>



陸中海岸風景（1954年）／宮古市立重茂中学校所蔵

5 指導展開例

(1) 事前の教育活動

2・3年美術科で、生活の中の様々な用具や造形などの受け継がれてきたものを鑑賞し、その時代に生きた人々の美意識や創造的な精神を感じ取り味わい、文化の継承と創造の重要性を理解する。

(2) 本時の展開案

過程	主な学習活動と発問 (○) ※主発問(◎)	期待する生徒の反応	指導上の留意点、資料 (■)
導入	1 保正が生きた時代の日本の洋画（肖像画）を時代順に示して、気付いたことを話し合う。 ○ どんな服装ですか。また、どんな技法ですか。 2 雫石あねこの写真を示し、保正が美的価値を認めたものであることを知らせて、資料を読む視点を示す。	・浴衣や中国服、洋服を着ている。 ・着物の絵が無い。 ・日本画ではなく洋風の絵である。 ・人物が立体的に描かれている。 ・昔からある普通の着物で、価値があるようには見えない。 ・保正は、この装束からどのような美に価値を見いだしたのだろう。	■黒田清輝、藤島武二、安井曾太郎の肖像画 ・日本が西洋の美術や文化を学ぼうとしていた時代であったことを確認する。 ■写真「雫石あねこ」 ・上記の作品とはちがい、地方に昔からあるものであることを確認する。
展開	3 資料を読んで話し合う。 ○ 保正が柳宗悦の民芸について語った言葉にはっとさせられたのはなぜでしょう。 ○ 「秀衡椀」と「けら」に共通するよさは何でしょう。 ○ 「よい品物の背後にはいつも責任と思ひやりが控えている」とはどういう意味でしょう。 ◎ 「岩手の先人が築いたいろいろな文化を大切にしなければならぬ。」という保正の言葉について、あなたはどのように思いますか。	・自分が目指している美とは違うものだから。 ・作家ではなく職人の手仕事に価値があるという考えに驚いたから。 ・無名でもよい品を残す職人の手仕事に純粋さを感じたから。 ・欲の無い心で作られたものはきっと美しいと思ったから。 ・とてもいいものにつくられていること。 ・しっかりした丈夫なつくりであること。 ・使う人を思いやる願いがこめられていること。 ・責任とは、職人が誇りをもってしっかりしたものを作ること。 ・思いやりとは、職人が使う人のことを第一に考えていること。 ・伝統文化を守るには、まずその中にこめられた先人の思いや願いを知ることが大切だと思った。 ・先人が大切にしてきた伝統を自分たちも引き継ぎ守っていかねばならないと思った。 ・岩手の人と風土がはぐくんできた文化は、郷土の宝だと思った。	■写真「自刻像」 ・保正が作家として成功していたことを押さえておく。 ・有名作家と無名職人、作品と日用品という対比に着目して考えさせたい。 ■写真「松・笹模様の秀衡椀」 ■写真「遠野市小友地方のまだけら」 ・岩手の先人は、名を残さずともよい手仕事を残したことを確認する。 ・作り手が手仕事にける手間ひまを支えたのは、責任と思ひやりであることを考えさせたい。 ・「私は」という書き出しで思ったことを書かせることで、自分との関わりで郷土の伝統や文化について考えさせたい。 ・発表の前に数人で回し読みして、多様な考えがあることを理解させる。 ・発表を聞いて、それぞれが心に思ったことを大切にしたいことを伝える。
終末	4 郷土の伝統文化を大切にするためにできることを話し合う。 ○ 地元の伝統文化を支えていくために自分にできることは何ですか。	・地域のお祭りや年中行事に込められた願いについて調べてみる。 ・地域の行事を見直し、みんなで参加して楽しめるようにする。 ・親や祖父母から郷土料理の作り方を教わって一緒に作ってみる。 ・伝統芸能の伝承活動に参加する。	■地元の伝統文化や行事等の写真 ・これまでの自分と地元の伝統文化との関わりを振り返りながら、自分にできることを考えさせる。 ・伝統文化を伝えていくには、そのよさを味わうことができる人々の存在が欠かせないことを伝えて終わる。

(3) 事後の指導

地域の祭りや年中行事などの伝統文化のよさを見直す機会を今後も大切にするよう働きかける。

1 ねらい

各地に残る民芸品の美に気付き、その発掘に努めた先人の生き方を知り、郷土の人々が長年大事に守り育ててきた伝統や文化を大切にしていこうとする心情を育てる。

【4－（8）郷土愛】

2 資料について

（1）内 容

本資料は、西洋美術を学んで彫刻家となった吉川保正が、柳宗悦の提唱する「民芸運動」に出会い、岩手の手仕事の美しさとその価値を見出していった姿を描いている。

明治以来、日本は近代化を急ぐ一方で、古い日本的なものがどんどん打ち捨てられていった。そんな時代に、保正は、上京して西洋美術を学び、彫刻家として成功を収めた後に郷里に戻り、「民芸」に出会う。そして、実地調査で見つけた故郷の名も無き職人による手仕事の中に、その土地ならではの深く豊かな美が宿っていたことに気づき、郷土の文化の価値を確信するようになる。

こうした保正の姿を追いながら民芸の意味や価値を考えることで、先人の功績に尊敬と感謝の念を深め、郷土の伝統や文化を大切にしていこうとする心情を育てることができると思う。

（2）指導上の留意点

- 導入では、保正と同時代の日本の近代洋画作品（黒田清輝「湖畔」〔明治30年〕、藤島武二「芳蕙」〔大正15年〕、安井曾太郎「金蓉」〔昭和9年〕等）を提示し、西洋の美術や文化を吸収しようとしていた当時の日本の芸術家の作風や芸術的価値に気付かせた後で、雫石あねこの写真を提示し、保正がどのような美に価値を見いだしたのか考えさせることにより、課題意識をもたせる。
- 展開前半では、彫刻家として成功し郷里に戻った保正が、「民芸」の考え方に出会い、はっとさせられた理由について、有名作家と無名職人、作品と日用品という対比に着目して考えさせる。
- 展開後半では、「手仕事の背後にはいつも責任と思いやりが控えている」という言葉の意味を考えさせ、郷土に伝わる手仕事の価値について気付かせたい。
- 終末では、資料終盤の保正の言葉を受けて、自分が思うことを書いてまとめ、話し合うことで、本時のねらいとする価値に迫っていきたい。

3 他の教育活動との関連

（1）各教科

- ・社会 歴史……………「身近な地域の歴史（具体的な事柄を通して受け継がれてきた伝統や文化への関心を高める）」「アジアの民族運動（三・一独立運動）」
- ・美術 鑑賞……………「生活を美しく豊かにする美術の働き」「近代日本の美術」

（2）総合的な学習の時間…「地域の伝統文化とその継承活動の探究」

4 出展および参考文献

- ・「美をさぐる 吉川保正 作品と著作集」（社団法人岩手県文化財愛護協会 昭和56年発行）
- ・「美のひろがり 吉川保正～創造と発掘」（第14回盛岡市先人記念館企画展図録 平成7年発行）
- ・「吉川保正展」（第20回白亜記念会館企画展資料集 平成8年発行）
- ・「手仕事の日本」（柳 宗悦 著 昭和23年初版）

6 参考資料等

【小松藤蔵の略歴】

年号	西暦	主　な　出　来　事	
大正	5	1916年	10月1日 気仙郡末崎村に生まれる
昭和	6	1931年	漁業に従事
	12	1937年	横須賀海兵団に入団（海軍兵役）
	15	1940年	勲八等瑞宝章（軍事功労）
	18	1943年	勲七等瑞宝章（軍事功労）
	20	1944年	釜石在勤武官府より復員（海軍兵曹長、兵役8年8か月） 自営漁業（採貝藻漁業、イカー一本釣り漁業等）に着業
	24	1949年	海苔養殖を開始
	27	1952年	ブロック式海苔養殖の支柱を考案開発し新案特許を取得 （特許を一般に無償開放し普及に努める）
	28	1953年	天然わかめからの人工採苗に着手
	31	1956年	全国漁業技術研究発表大会において『水産庁長官表彰』、『全漁連会長賞』を受賞 発表題名「外洋における杭建式海苔養殖」
	32	1957年	わかめ養殖の企業化に成功
	34	1959年	冊子「わかめ養殖方法について」を自費出版し三陸沿岸を普及行脚開始
	42	1967年	岩手県知事表彰（産業功労） 販路拡大のため全国を行脚開始
56	1981年	黄綬褒章（業務精励／漁業）	
62	1987年	勲五等瑞宝章（水産業振興功労）	
平成	9	1997年	80歳で生涯を閉じる

【小松藤蔵の要職】

在任期間	役 職
昭和46年～58年	末崎漁業協同組合 組合長理事
昭和46年～60年	岩手県水産試験場運営委員会委員
昭和47年～50年	岩手県漁業共済組合理事
昭和50年～58年	大船渡魚市場株式会社取締役
昭和50年～58年	岩手県漁業共同組合連合会理事
昭和53年～58年	気仙郡漁業共同組合連合会副会長
昭和63年～平成5年	細浦魚市場株式会社代表取締役

【顕彰費建立記念除幕式での御礼文より】

小松藤蔵元末崎漁業協同組合組合長は、平成9年、80歳で長寿を全うされましたが、郷土の生んだ漁民・漁協組合運動家として灯の消えることはありません。

私達は、この不朽の功労を讃え遺徳を後世に伝えるため、わかめ養殖発祥地と顕彰の碑を建立するものがあります。

郷土の誇りとして次世代に続く若者達に希望を与えるものであり、この地に生まれた養殖わかめ技術が益々発展することを願い、漁業者、漁業団体、わかめ養殖に関わる商工業団体の皆様から浄財を拠出願い完成したものであります。趣旨をご理解頂き、ご賛同の上ご協賛されました各位に、深甚なる敬意を表する次第であります。

誠にありがとうございました。

平成19年5月5日

わかめ養殖発祥地顕彰碑建立する会

5 指導展開例

(1) 事前の教育活動

社会科において、我が国の漁業の特色と課題について学習することにより、水産業の現状に対する理解を深め、関心をもたせる。

また、学校行事等において、地域の高齢者等との交流の機会をもつことにより、地域を創り上げてきた人々への感謝の気持ちを育む。

(2) 本時の展開例

過程	主な学習活動と発問 (○) ※主発問 (◎)	期待する生徒の反応	指導上の留意点、資料 (■)
導入	1 自分の地域について想起する。 ○ あなたの地域の自慢は何ですか。	・～が盛んです。 ・～の出身地です ・～という名勝地があります。	・自分との関わりで考えさせ資料への方向付けを図る。 ・自慢できることについて、自分がどんな関わりをしているかを聞いてみるが、深入りはしない。
展開	2 資料を読んで、藤蔵の気持ちや行動について話し合う。 ○ 海原や漁民の姿を黙って見つめていた藤蔵はどんなことを考えていたのでしょうか。 ○ 仲間とともに喜び合ったときの藤蔵はどんな気持ちだったのでしょうか。 ◎ 藤蔵が郷土の海に対する思いを生涯絶やすことがなかったのはなぜでしょう。	・地元の人々の生活を楽にしたい。 ・海の恵みをいかせないだろうか。 ・きれいなこの海をいかした方法はないものか。 ・苦しいところもあったが、頑張ってきたよかった。 ・漁民の生活が豊かになる。 ・これで郷土の海が活性化する。 ・郷土（海）が大好きである。 ・郷土を豊かにしたいという強い気持ちをもっていた。 ・海の恵みの恩恵を受けて生きているという感謝の思いがあった。 ・先人から受け継いだ大切な海をさらに良いものにして、次につないでいきたいと考えたから。	■写真「基石浜の一角」 ・藤蔵にとって海はどのような存在だったのかを考えさせ、藤蔵の海への思いを捉えさせる。 ・漁業を営んでいくには厳しさもある。それでも取り組んでいこうとする藤蔵や漁民の思いを考えさせる。 ・養殖技術や体制が確立するとどうなるのか、何が良くなるのかを確認し、研究等を続け、技術、体制を生み出した藤蔵を支えたものについて考えさせる。 ・自然災害にめげなかった藤蔵の心情を考えさせる。 ・藤蔵の言葉の意味を考えさせ、藤蔵の郷土に対する思いに、生徒の考えをつないで迫っていく。 ■写真「藤蔵の顕彰碑」 ・碑文の内容から、藤蔵への尊敬や感謝の気持ちを考えさせる。 ・考えを書き表すことで、今後の自分の在り方を見つめさせる。
終末	3 自分の考えを言語化する。 ○ あなたは自分の地域のためにどんなことを大切にして過ごしていきたいですか。 4 互いの考えを交流する。	・郷土のために自分の得意なことを生かしたい。 ・自分の地域に目を向けて過ごしていきたい。 ・自分を育ててきた郷土に誇りをもち、貢献したい。	・他の生徒の考えを聞くことで、自分の考えを深め、実践意欲をもたせる。 ・生徒の意欲的な発表内容にふれ、余韻をもって終わる。

(3) 事後の教育活動

特別活動等において、地域の人々と人間関係を築くための交流の機会をもたせたり、地域社会の実態を把握させたりして、地域社会の形成に参画しその発展に努力しようとする態度を養う。

1 ねらい

郷土を愛しながら社会に尽くした先人の努力に思いを寄せ、郷土の発展に努めようとする実践意欲を育てる。

【4－（8）郷土愛】

2 資料について

（1）内容

戦後、漁村の人々の生活は忙しく貧しいものであった。特に天然わかめで生計を立てていた漁師は重労働の上、わずかばかりの収入を得ていた。わかめも養殖によって良質なものを大量に生産できると考えた藤蔵は、郷土の豊かな海を生かして、地元漁民の生活を少しでも改善しようと、わかめ養殖技術の研究を始める。最初はそれをただ眺めるだけであった周りの漁師たちであったが徐々に、藤蔵の行動や結果に心を動かされ、協力するようになっていく。

本資料を通して、苦労を共にしながらも、郷土の漁業の発展に尽力した藤蔵の行動や思いに目を向けさせることによって、進んで郷土の発展に努めようとする積極的な生き方への意欲を育てることができると考える。

（2）指導上の留意点

- 海原や漁民の姿を見つめる藤蔵の心情を考えさせることによって、自分にできることで郷土のために貢献することを決意する藤蔵の気持ちをとらえさせたい。
- 藤蔵が、苦労を重ねながらも、郷土の海に対する思いを生涯絶やすことがなかったのはなぜか、それを支えたものはどのようなものだったのかを、藤蔵の言葉をもとに考えさせる。
その際、生徒の意見をつなぎながら話し合わせることによって、郷土の発展に努めようとする積極的な生き方への意欲を引き出したい。
- 「顕彰碑の写真」や「建立する会の御礼文」を効果的に使いながら、郷土の発展に貢献して生きた先人への尊敬と感謝の気持ちを育むようにしたい。
- 「自分の地域のためにどんなことを大切にして過ごしていきたいか」との問いに対する互いの考えを交流することによって自分の考えを深め、郷土の発展に努めようとする実践意欲を育みたい。

3 他の教育活動との関連

（1）各教科

- ・社会 地理的分野 「日本の諸地域」「身近な地域の調査」
- ・理科 第2分野 「生命の連続性」

（2）特別活動、総合的な学習の時間

- ・地域の人々との体験活動

4 出典及び参考文献

- ・岩手県漁業史
- ・大船渡市史
- ・末崎の郷土史
- ・おおふなと昔がたり

6 参考資料等

【後藤新平の年譜】 ※年齢は数え年

年号	西暦	年齢	主な出来事
安政	4	1857年	6月 後藤新平が生まれる。
明治	2	1869年	13歳 書生として引き立てられ県庁に勤務する。
	6	1873年	17歳 福島第一洋学校に入学する。
	7	1874年	18歳 須賀川医学校に入学する。
	13	1880年	25歳 愛知県医学校長兼愛知病院長に就任する。
	15	1882年	26歳 暴漢に襲われた自由党総裁板垣退助の手当をして命を救う。
	23	1890年	34歳 ドイツに留学する。
	25	1892年	36歳 内務省衛生局長に就任する。
	31	1898年	42歳 台湾総督府民政長官となる。
	39	1906年	50歳 南満州鉄道初代総裁に就任する。
	41	1908年	52歳 逓信大臣と鉄道院総裁となる。郵便ポストが朱色に定められる。
大正	7	1918年	62歳 外務大臣となる。
	8	1919年	63歳 拓殖大学の学長に就任する。
	9	1920年	64歳 東京市長（現在の知事）に就任する。
	12	1923年	67歳 9月1日 関東大震災が発生する。 2日 内務大臣に就任する。 6日「帝都復興の議」を閣議で提案する。
	13	1924年	68歳 東京放送局（現NHK）の初代総裁となる。
昭和	4	1929年	72歳 4月 遊説で東京から岡山に向かう途中倒れ京都の病院で逝去する。
	5	1930年	帝都復興祭が行われる。

（後藤新平記念館「後藤新平 略年譜」等より作成）

【後藤新平の残した言葉等】

①「活動すること」を重視した言葉

妄想するよりは活動せよ
疑惑するよりは活動せよ
説話するよりは活動せよ
（『処世訓』より）

②「自主」「奉仕」の大切さを示す言葉

「自治三訣」
人のお世話にならぬよう
人のお世話をするよう
そして、むくいを求めぬよう

③記者会見における昭和天皇の言葉

復興にあたって後藤新平が非常に膨大な復興計画をたてたが……もし、それが実行されていたらば、おそらくこの戦災（東京大空襲）がもう少し軽く、東京あたりの戦災は、非常に軽かったのではないかと思って、今さら後藤のあの時の計画が実行されなかったことを非常に残念に思っています。
（高橋紘『陛下、お尋ね申し上げます』文春文庫 より）

④「行動力」のある人間が大切なことを示した言葉

午後3時ごろの人間は使わない。満州は午前8時の人間でやる。
（鶴見祐輔『正伝 後藤新平』藤原書店 より）

⑤「社会」や「市民」のあり方を示唆する言葉

道幅が広くなり、生活が良くなったら、それでよろしいかと言えば、決してそうではありません。
市民の了解、市民の協力がなくてはなりません。
個人の自治的精神が国家や法律が及ばないところを助けるのです。
（「都市計画と自治の精神」『都市計画講習録全集』第1巻、都市研究会 より）

5 指導展開例

(1) 事前の教育活動

社会科歴史的分野において「関東大震災」の被害の状況について理解させる。その際に、死者の大半が火災によってもたらされたことを確認する。

(2) 本時の展開例

過程	主な学習活動と発問 (○) ※主発問 (◎)	期待する生徒の反応	指導上の留意点、資料 (■)
導入	1 関東大震災と後藤新平の写真を紹介し、学習内容についての見通しをもつ。	- 関東大震災では街が焼けつくされている。 - どのように復興したのだろうか。	■関東大震災時の写真 ■後藤新平の写真(略歴) - 関東大震災の被害の様子を写真から読み取らせ、その復興に政治生命をかけた後藤新平の生き方から学ぼうとする意欲をもたせる。
展開	2 資料を読んで、主人公の気持ちや行動について話し合う。 ○ どんな思いで、復興計画をうちたてたのでしょうか。 ○ 苦勞して作成した復興計画を批判されたり、反対運動が起きたりしたとき、どんな思いだったのでしょうか。 ◎ 多くの批判をあび、プライドを捨ててまで計画を進める新平を支え続けたものは、何だったのでしょうか。 3 把握した価値と自己とのかかわりを考える。 ○ 新平の生き方から、学んだことをノートに書きましよう。	- 災害に強い街づくりをしたい。 - 人の命、暮らし、未来を守りたい。 - せっかく作成したのに反対されて悔しい。 - なぜ、分かってくれないのか。 - 先を見据えた考えをして欲しい。 - 自分のプライドや面目より、人々の命や生活を守る方が大切という強い信念。 - 人々を救いたいという強い気持ち。 - 市民のために全力で働く部下の情熱。 - 人々を救わなければならないという責任感。 - 信念を貫く強さ。 - プライドや面目より社会や人のためを考える強さ。	・「復旧」と「復興」の違いについてイメージをもたせる。 ・4つの「復興計画」の柱(復興費30億円、道路や公園の整備、遷都をしない、土地を買い上げる)を確認し、その狙いから主人公の思いを考えさせる。 ・修正案を受け入れたこと、辞職(政治的に空白の期間が生まれる)をしなかったことは、人々の生活を第一に考えたことによるものであることに気付かせる。 ■挿絵「新平と部下」 ・新平の心の揺れを挿絵から考えさせる。 ■復興後の昭和通りの写真 ・昭和通りと終戦直後の写真を比べさせ、復興の様子を確認させる。 ・新平の生き方を、見習うべきこと(活かすべきこと)として考えさせる。
終末	4 新平の残した言葉について考えさせるとともに、教師の説話を加える。	正しいと判断したことは、「活動」に移すことが大切だ。	■新平の言葉① ・信念をもって「行動」することの大切さに気付かせる。

(3) 事後の教育活動

社会科公民的分野の授業においては、市民の役割と責任について理解を深めさせるとともに、生徒会活動や学級活動等の自治活動においては、審議と決定、責任と役割のあり方等について確認させる。

1 ねらい

困難な状況でも高い目標をもち、強い意志をもって自分ができる最善のことをやり抜こうとする心情を育てる。
【1－（2）強い意志】 ※関連項目【4－（4）役割と責任】

2 資料について

（1）内 容

大正12年（1923年）9月1日に関東大震災が起こった。その惨状を間近にみた後藤新平は、人命を第一に考えた都市づくりを目指し復興計画をたてた。しかしながら、後藤新平が立てた復興計画は、周囲から様々な批判を浴びるとともに、計画に対する反対運動まで起こった。

このような状況の中、悩みながらも人々のために、自分のプライドや地位を捨て、復興を急いだ後藤新平の強い意志や信念に触れ、自らの生き方を考えさせることができる資料である。

（2）指導上の留意点

- 後藤新平の略歴について簡単にふれる。
 - ・ 後藤新平の関わってきたことで現代にもつながるものについて確認する。
（「郵便ポストの色の決定」「鉄道の軌道幅の決定（新幹線）」など）
 - ・ 医者として板垣退助を助けたエピソードについてふれる。
- 復興計画の4つの柱と計画のねらいを確認する。
 - ・ 遷都はしないこと。 ※東京の人々の混乱を招かないため
 - ・ 30億円の復興予算とする（当初）。 ※当時の国家予算の2倍
 - ・ 欧米の最新の都市計画を適用する。 ※広い道路、公園＝防災や車社会に対応するため
 - ・ 都市計画のために焦土を政府が買い上げる。 ※都市計画を推進するため
- 後藤新平が断腸の思いで復興計画の修正を受け入れたときの気持ちや判断のもとになったものを考える。
- 後藤新平の生き方や残した言葉、「妄想するよりは活動せよ」、「疑惑するよりは活動せよ」、「話説するよりは活動せよ」（『処世訓』より）から、今の社会や自分（たち）に必要なことを考える。
- 現在、東京で工事が進んでいる環状2号線は、後藤新平が復興事業で計画したものであることや、昭和通り、新幹線の軌道などに触れることで、今日の東京の繁栄と後藤新平の果たした役割について確認する。

3 他の教育活動との関連

（1）各教科

- ・ 社会科 歴史的分野「新しい生活と文化（大正期）」
公民的分野「地方の政治と自治」

（2）特別活動

- ・ 生徒会活動

4 出典及び参考文献

- ・ 越澤明『後藤新平 一大震災と帝都復興』ちくま書房
- ・ 郷仙太郎『小説 後藤新平 行革と都市政策の先駆者』学陽書房
- ・ 高橋紘『陛下、お尋ね申し上げます』文春文庫
- ・ 写真の提供は奥州市水沢区にある「後藤新平記念館」

6 参考資料等

【宗真の年譜】

年号	西暦	年齢	主 な 出 来 事
弘化	4	1847年	宗真生まれる。
元治	1	1864年	17歳 父の指導で初めての養蚕に成功する。この後、毎年養蚕を行う。
慶応	1	1865年	18歳 小国村の三浦ヤエ（16歳）と結婚する。 父の指導で畜産について学び始める。
	2	1866年	19歳 母死。長女リエが生まれる。
	3	1867年	20歳 父捷之（かつゆき）死。
明治	3	1870年	23歳 白見山麓に牧場を開く。（牛21頭、馬21頭を放牧） 長男東麻（とうま）が生まれる。
	5	1872年	25歳 10月 白見牧場を休牧とする。負債のため牛馬は売却する。
	6	1873年	26歳 1月 牧畜、養蚕研究のため全国に視察の旅に出る。
	8	1875年	28歳 江繋村共同牧場を開く。測量の腕を買われ、検地を行う。
	9	1876年	29歳 3月に副戸長となったが5月に副戸長を辞し、立丸牧場を開く。
	11	1878年	30歳 立丸牧場を拡張。県令の島惟精に牛の貸与を申し出る。（15頭） 遠野町農事試験所設立。
	12	1879年	32歳 県より126頭の牛の貸与を受けて農家に飼養させる。 私立図書館（信成書籍館）を設立する。
	13	1880年	33歳 金沢村多賀ノ巣に牧場を開く。（県より牛33頭貸与される）
	15	1882年	35歳 大野牧場を開設する。 小国、金沢、江繋、立丸、大野の5牧場で牛216頭、馬69頭飼養。
	16	1883年	36歳 妻ヤエに遠野地方で初めて牛乳を販売させる。
	17	1884年	37歳 蚕のエサとなる桑の木一万本を遠野に植林する。
	19	1885年	38歳 遠野製糸場を設立。（女工30名⇒翌年60名⇒次の年132名に） 大野牧場火災。
	23	1890年	43歳 遠野製糸場を廃止。
	24	1891年	44歳 種山牧場の設計を依頼される。
	27	1894年	47歳 大野牧場閉鎖を命ぜられる。
	28	1895年	48歳 陸羽中央鉄道（山田～花巻線）の計画書を作成し発起人会を作る。
	29	1896年	49歳 6月15日 明治三陸地震津波発生（犠牲者 約2万2千人） 被害地調査を県に申し出て調査員となり700kmを44日間で歩いて調査する。
	36	1903年	56歳 三陸大津波調査を帝国図書館（国立国会図書館）に寄付する。
	42	1909年	62歳 農事試験所の報告書等を帝国図書館に寄付する。 2月 病気のため逝去する。

*「遠野の生んだ先覚者 山奈宗真」より抜粋。

【三陸大津波調査】

明治29年（1896年）6月15日午後7時33分、釜石の東方沖を震源としてマグニチュード8を超える地震が起り、巨大津波が発生した。津波は一晩中続き、数十回にも及んだという。約22,000人も犠牲者を出した「明治三陸地震津波」である。当時、岩手県にはまだ、ラジオやテレビはもちろん、電話も自動車もない時代である。被災から一か月経っても沿岸の詳しい状況をつかむことは難しかった。余震が続き、大きな地震がまた起こるかもしれないという恐怖感もあった。そんな中、苦しんでいる人を放ってはおけないという強い思いで、遠野から沿岸の被害調査に向かった人がいる。山奈宗真である。49歳の宗真は、たった一人で44日間に渡る調査を成し遂げた。ワラジをはいて、約700kmにも及ぶ道なき道を歩き続けた。常人では考えられないような精神力と体力で調査を成し遂げた。国立国会図書館に残っている明治三陸地震津波の調査報告書には、津波の被害状況ばかりでなく、宗真の思いが記載されている。「漁村の新しい位置をどうするべきか」「漁村を迅速に復興させるにはどうしたらよいか」「漁民の生活を将来どのように再建していくか」など、調査項目は多岐にわたり、防潮林を堤防と併用して採用すること、住居は海岸近くの作業小屋と離して高台に作ること、お互いに助け合う相互扶助の習慣を失わないことなど、津波の予防対策、短期的な復旧対策、長期的な復興対策など、現代に生きる提案がなされている。

(2) 本時の展開例

過程	主な学習活動と発問 (○) ※主発問 (◎)	期待する生徒の反応	指導上の留意点、資料 (■)
導入	1 江戸から明治にかけての庶民のくらしや地域の様子について確認する。 ○ 江戸から明治にかけての庶民のくらしや地域の様子について知っていることをあげてください。	- 盛岡藩は貧しく、大規模な百姓一揆が起るほど人々の生活は苦しかった。 - 今ほど農業技術が進んでいなくて、冷害などによって作物がほとんど育たなかった。 - 明治維新や外国船の来航などがあり、世の中は混乱していた。	- コの字隊形など、お互いに考えを交流し合う雰囲気大切に。 - 時間をかけすぎない。 ■写真や挿絵など、当時の様子を視覚的に想像できる資料を準備する。
展開	2 資料を読んで話し合う。 ○ 全財産を投げ打って白見山麓に牧場を開いた宗真のことをどう思いますか。 ○ 小箱をじっと見つめながら宗真はどんなことを考えていたと思いますか。 ◎ 資金が全くないのに、県令に胸を張って答えられたのはどうしてでしょう。 3 把握した価値と自己とのかわり考える。 ○ 宗真の考え方や生き方から、自分が強く感じたことや学んだことをまとめなさい。	- 父の教えを守っているところが素晴らしい。 - 失敗を恐れずに挑戦したからこそ、この後の成功が成し遂げられたのだと思う。 - 人々のために財産を投げ打つなんて信じられない。 - 気持ちは分かるが、軽率ではないか。家族のことも考え、慎重に行動するべきだった。 - もっと慎重に考えるべきだった。 - 莫大な借金をどうしよう。 - こんなことで負けてはいられない。今度こそ成功できるように、畜産業を学ぼう。 - 迷いがなくなり、絶対に成功させなければならないという決意があった。 - 失敗したことや視察の旅に出たことで、今度こそという自信があった。 - 人々を救いたいという自分の強い気持ちに自信があった。 - 宗真の人生から、自分や家族のためだけでなく、郷土の発展のために努力する尊さを学んだ。 - 多くの苦勞をしてこそ成功があること、信念をもつ大切さを学んだ。 - 人生の目標を達成するには、思い切って挑戦することの大切さを学んだ。 - 岩手にこのような人がいたことを誇りに思う。	■山奈宗真の年譜を提示して資料の理解を助ける。 - 称賛する立場と否定的な立場と両面から、宗真の行動について考えさせる。 - 宗真の成功が、大きな挫折を乗り越えたものであることをしっかりとらえさせる。 ■挿絵「繭を入れた小箱」 - 小箱が父の教えの象徴であることを押さえさせる。 - 宗真の苦悩に共感させる。 - 活発な発言がない場合、自分だったらどうするか考えさせる。 ■挿絵「宗真と島惟精」 - 県令は国から派遣された役人であることと、お金もなく成功するかもわからない田舎の牧場経営者という立場の違いから、宗真の申し出の無謀さを押さえたうえで考えさせる。 - すべての生徒に自分の考えを発表させるために、グループ交流と全体交流を効果的に位置付ける。
終末	4 本時のまとめをする。 ○ 宗真の逸話の紹介。(参考資料等参照)	宗真の信念は、産業を盛んにすることではなく、郷土の人々を救うという深い人間愛に基づくものであった。	■参考資料 (三陸大津波調査) - 明治三陸大津波調査についての宗真の業績を紹介し、本時の価値にかかわり、宗真の郷土に尽くした生涯に対する思いを深める。

(3) 事後の教育活動

授業の疑問や興味・関心から、地域の先人や郷土の伝統・文化について調査したり、他の「岩手の先人」の本や資料の読書につなげたりさせて、郷土に対する認識を深めさせる。

1 ねらい

自分一人のためではなく郷土の発展のために生涯を捧げた先人の生き方から、地域社会の一員としての自覚をもち、郷土の発展に努めようとする心情を育てる。

【4－（8）郷土愛】

2 資料について

（1）内 容

遠野に生まれ、厳格ながらも広い視野と深い人間愛をもつ父に育てられた山奈宗真が、遠野地方の人々の暮らしを豊かにするため産業振興に尽力した生涯を描いた資料である。

宗真は、武士という身分や牧場を開く財産があったことなどを考えると、自分の幸福を追求する人生を選択することもできたはずである。しかし、「農民のために働きなさい」という父の教えを守り、その生涯を郷土の発展に捧げる。宗真を支えた人や言葉（小箱）にも気付かせながら、宗真の努力に思いを寄せることで、先人への尊敬と感謝の気持ちをはぐくみたい。

（2）指導上の留意点

- 導入では、社会科の学習を想起させたり、事前学習を生かしたりすることで、江戸時代の身分制度や地域の産業と私たちの暮らしなど、時代背景についてしっかりつかませたい。
- 展開前半では、自分のことよりも郷土の人々の暮らしを豊かにしたいという考えと、現実の苦悩や失敗をどのような思いで克服していったのかについて、生徒相互の意見交流をもとに考えを深めさせたい。
- 展開後半では、宗真の生き方から一人一人の生徒がどのようなことを学びたいと考えたかについて交流することで、自分自身の生き方や考え方について振り返らせたい。

3 他の教育活動との関連

（1）各教科

- ・社会（歴史） 第2学年 「近代の日本と世界」

（2）総合的な学習の時間

- ・「郷土の先人から学ぼう」

4 出典及び参考文献

- ・「遠野の生んだ先覚者 山奈宗真」 田面木貞夫 編著 （遠野市教育文化振興財団 昭和61年3月31日）
- ・「岩手の先人（第三集）」 日本教育会岩手県支部調査研究部会 編集
（日本教育会岩手県支部 平成15年1月31日）
- ・「山奈宗真の津波被害調査資料を読む」 前川さおり （『遠野学』vol.1 平成24年3月）

5 指導展開例

（1）事前の教育活動

郷土資料館や郷土史研究所等から資料を集め、江戸時代末期の地域のくらしや様子について学習させる。教師が作成した資料を教室に掲示する工夫も考えられる。

6 参考資料等

【富田小一郎略歴（1859～1945）】

年号		西暦	年齢	主 な 出 来 事
安政	6	1859年		5月22日 岩手郡新庄村（現 盛岡市）に生まれる。
慶応	4	1868年	9歳	作人館修文所に入学。漢学、英語、数学を修業。
明治	2	1869年	10歳	母 ミヨ死去。
	7	1874年	15歳	兄 大二郎死去。
	8	1875年	16歳	官立宮城英語学校（後に宮城県立仙台中学校に改称）に入学する。
	9	1876年	17歳	父 哲死去。
	10	1877年	18歳	学費に困り大学予備門を退学する。
	18	1885年	26歳	東京大学文学部政治学科理財学（経済学）第二年選科に入学する。
	24	1891年	32歳	岩手県尋常中学校（後の盛岡中学校）教諭試補として赴任する。
	26	1893年	34歳	岩手県尋常中学校教諭に任命される。
	32	1899年	40歳	私立盛岡商業学校校長兼教師（夜間）として同校を経営する。
	39	1906年	47歳	私立盛岡商業学校校長兼教諭を退職する（廃校のため）。
	40	1907年	48歳	気仙郡末崎村細浦（現大船渡市末崎町）へ移り住み、漁業に従事する。
	44	1911年	52歳	細浦の下宿を引き上げ、盛岡へ戻る。
大正	2	1913年	54歳	市立盛岡商業学校設立が許可される。
	9	1920年	61歳	私立盛岡実践女学校を創設し校長兼教師となる。
昭和	3	1928年	69歳	実業教育功労者として昭和天皇の単独拝謁を賜る。
	14	1939年	80歳	東京赤坂の料亭「幸楽」において謝恩会が開催される。
	20	1945年	86歳	死去（数え年87歳）。盛岡市北山法華寺にて葬儀が行われる。

【富田小一郎にかかわるエピソード（※終末の教師説話等に活用）】

○ 岩手育英会の発足

189（明治31）年、三田義正、富田小一郎、三浦直道、三田俊次郎が中心となって、岩手育英会（経済的な理由により、就学が困難な学生に奨学金を貸与する）が発足した。富田は長く育英会の庶務を担当し、熱心に学生たちの世話をしていた。

○ 富田小一郎と水泳

1913（大正2）年、岩手水泳会が富田らによって組織され、北上川と雫石川の合流する「落合」で、本県初の水泳大会が行われた。商業学校では、創立当初から授業の一環として水泳が行われ、富田が自ら指導した。さらに、80歳を過ぎても「忍者のような泳ぎ」は健在であったという。

○ 敬愛に満ちた別れの言葉

1945（昭和20）年2月2日。入院中の小一郎は、静かに息を引き取った。

粉雪の舞う中、葬儀が行われ、田子一民からも、次のような弔辞が寄せられた。

「先生は幸福な方でした。先生は盛岡中学で数学を教えられました。その教え方が上手なために、大臣、大将が生まれたとは思えません。先生は授業が上手ではなかったが、率先垂範、魂を持って教育されました。卒業後もいろいろとご指導を受けました。がんばれ——これが先生の教えであり、われわれの心に深い感銘を与えたのでありました。」

(2) 本時の展開例

過程	主な学習活動と発問 (○) ※主発問 (◎)	期待する生徒の反応	指導上の留意点、資料 (■)
導入	1 「よく叱る師ありき」の短歌を読んで、「師」の人物像を想像する。	- 叱られながらも、愛着をもっていたのだろう。 - 啄木と先生とのかかわりが深かったのだろう。	■「よく叱る師ありき」 短歌から、啄木の気持ちを想像させる。
展開	2 資料を読んで話し合う。 ○ 盛岡中学校の生徒にとって、小一郎はどのような先生だったのだろう。 ○ 経験のない漁業を行ってまでも、学校設立の資金を得ようとした小一郎をどう思うか。 ○ 漁業に失敗し、貧しい暮らしをしながらも若者を指導し続けたのは、どういう気持ちからだろう。 ◎ 2つの学校が創立したとき、小一郎はどのようなことを考えただろうか。 ○ たくさんの教え子に囲まれた謝恩会を、新聞が「日本一」という見出しで取り上げたのはなぜだろうか。 また、小一郎はどのような気持ちだっただろうか。	- 厳しいが、生徒思い。 - 親身になってくれる。 - 父親のような存在。 - 意志の強さを感じる。 - 生徒のために行動できる情熱に敬服する。 - たとえ困難でも、挑戦したことがすばらしい。 - 将来のある若者の力になりたい。 - 自分はどのような状況でも彼らの指導を続けよう。 - 諦めなくてよかった。 - これで商業教育を充実させることができる。 - 若者を応援し続けたい。 - 多くの優秀な人材を育て、今なお慕われているから。 - 教師をやってきてよかった。 - 教え子の成長がうれしい。	■写真「柔道部」 「慈父」と表現された意味を考えさせる。 ■写真「三立丸」 - 危険と隣り合わせであること、不漁もありうることなど、困難な状況を理解させ、それでも決心した点を押さえる。 - 小一郎の使命感を、生徒の言葉で十分に語らせるようにする。 - 小一郎が「女子教育の父」と呼ばれていることにも触れる。 ■写真「謝恩会」
終末	3 把握した価値と自己とのかかわりを考える。 ○ 小一郎の生き方から、あなたが大切だと考えたことをノートに書いて話し合おう。	- 理想や志をもって将来に向かって努力したい。 - あきらめずに夢や理想を大切にしたい。	

(3) 事後の教育活動

総合的な学習の時間等で、岩手の先人について調べる学習活動を行う。

1 ねらい

真理や真実を求めつつ、生きることの意味を見だし、目標をもって、よりよく生きようとする心情を育てる。

【1－（4）理想の実現】

2 資料について

（1）内 容

自らも学費に苦勞しながら教師となった富田小一郎は、盛岡中学校の教師として厳しくも温かく生徒を指導し、教え子たちからは「慈父」と慕われた。やがて、商業教育に携わり、地域の産業に貢献する人材を育てることに教育者としての使命を感じ、学校設立の資金を得るために漁業に従事するなど、あらゆる努力を惜しまなかった。その努力の根底には、若者の将来を応援したい、男も女も社会で自立できるだけの力をつけてやりたいという強い気持ちが常にあった。多くの教え子に囲まれた「日本一の先生」の熱い思いとひたむきな行動を追体験しながら、価値に迫らせたい。

（2）指導上の留意点

- 導入では、「よく叱る師ありき」の短歌から、作者であり生徒である石川啄木の心情を考え、教師富田小一郎に対する、啄木のかかわりの深さや愛着の気持ちを十分に想像させるようにする。
- 展開では、小一郎の行動や考え方を追体験しながら、教育者として若者の将来を支えようとする小一郎の使命感、どんな苦勞があっても揺るがない強い意志をとらえさせる。そして、自分の人生をかけて理想を実現しようとする小一郎の生き方を感じ取らせたい。
- 終末では、小一郎の生き方から学んだ価値について書く活動、話し合う活動を取り入れて、自分自身を振り返らせ、生徒にも志をもって前向きに生きようとする気持ちを確認させたい。

3 他の教育活動との関連

（1）総合的な学習の時間

- ・「郷土の先人」（地域の特色に応じた課題学習）

（2）特別活動

- ・進路学習との関連を図る。

4 出典及び参考文献

- ・第42回盛岡市先人記念館企画展パンフレット「富田小一郎 日本一の先生」

5 指導展開例

（1）事前の教育活動

総合的な学習の時間における「郷土の先人」の学習を通して、富田小一郎の業績について学び、興味・関心をもたせる。

第二章

指導編

もくじ

第二章 指導編

一	日本一の先生	富 ^{とみ} 田 ^た	小 ^こ 一 ^{いち} 郎 ^{ろう}	⋮	指 ^{さし} 1
二	郷土に産業の灯火を	山 ^{やま} 奈 ^な	宗 ^{そう} 真 ^{しん}	⋮	指 ^{さし} 4
三	復旧にあらず 復興なり	後 ^ご 藤 ^{とう}	新 ^{しん} 平 ^{へい}	⋮	指 ^{さし} 7
四	だからこの海を	小 ^こ 松 ^{まつ}	藤 ^{とう} 蔵 ^{ぞう}	⋮	指 ^{さし} 10
五	いわての美をさぐる	吉 ^{きつ} 川 ^{かわ}	保 ^{やす} 正 ^{まさ}	⋮	指 ^{さし} 13
六	村を救った防潮堤	和 ^わ 村 ^{むら}	幸 ^{こう} 得 ^{とく}	⋮	指 ^{さし} 16

この資料集の編集にあたった先生方（順不同）

◇道徳資料集作成委員

及川 公子（盛岡市教育委員会 指導主事）
菊池 勉（奥州市教育委員会 指導主事）
田畑 周哉（沿岸南部教育事務所 指導主事）
佐藤 智一（宮古教育事務所 主任指導主事）
向折戸 博昭（県北教育事務所 主任指導主事）
長根 義広（県立総合教育センター 研修指導主事）

◇道徳資料集協力委員

稲垣 キツ子（盛岡大学文学部児童教育学科 非常勤講師）
川守田 毅（区界高原少年自然の家 社会教育指導員）
尾澤 厚子（奥州市立白鳥小学校 校長）

◇表紙、本文中イラスト

齊藤 眞理子（久慈市立夏井中学校 校長）

◇題字

藤岡 宏章（野田村立野田中学校 校長）

◇事務局

小菅 正晴（岩手県教育委員会事務局学校教育室 首席指導主事兼義務教育課長）
飯岡 竜太郎（岩手県教育委員会事務局学校教育室 主任指導主事）
森本 晋也（岩手県教育委員会事務局学校教育室 指導主事）
水城 久美子（岩手県教育委員会事務局学校教育室 主事）